

第十二回

美しさ

運動会が盛況のうちに終わりはや一ヶ月半。季節は晩秋のおもむき。大気も冷えて、運動会の熱気も冷めた頃に、冷静な頭でふりかえって思ひよう。

運動会だから競技があります。競技には勝敗がつきます。「勝って嬉しい負けて悔しい」これは大切です。競争心が未分化な年少児は別として、びさいでは勝敗をうやむやにして「みんな一等賞」なんてことはいけません。それは悪平等と言って日本を悪くしてきた要因の一つであり、そんなうそっぽい仲良しを装う意味があるのかしら。

悔しさをバネにするもよし。五位がいるから一位もいる、五位も一位もかけがえのない意味をもつという関係性「気づくもよし」。

年長児のリレーを思い出せますか。負けた子たちの涙。真剣にやった証です。恒例の保護者競技「マシ走りリレー」の、たかが子ども幼稚園の運動会でもこの日まで熱くなるのだらうと思つたほどの、異様な盛り上がり。マジだからです。いづれも勝ち負けがあるが故です。

それを認めたらうさで、結局勝ち負けに行きついでこの場合の負けには注意しなければなりません。あらぬ悔しさを勝ち負けに収斂（しゆうれん）させよう先ごみえるのは「勝ち組」「負け組」などという無思慮な枠組み。色あせた結果のみでプロセスの多様性が見えなくなります。

びさい運動会は、先生方のアイデアと工夫



に満ちた競技が魅力の一つですが、競技の中に競争の否定をはらんだ競技があるのが、おもつてい。

スタートしてゴールに着く速さを競うはずが、急ぐのを忘れたくなるものがある。はらへておもむきをゴールにした競技があったのですが、子どもたちはつまずくまの卵の姿からスタートして、ほぶく前進する幼虫、鉄棒にぶら下がるそのなまを経て、蝶になつてゴールインというもの。

おもむきの姿をたどる最後、蝶の羽をつけたとたん、子どもたちは蝶になりきります。速くは一気に減速します。舞うからです。その子もまたらの関心はいつか蝶らつてみるか、のようです。じつに丹念に、丁寧に、蝶を表現することに余念がない。ゴール付近で競争が一気に否定されて、別のスナージが現出する、そのさまがとてもおもしろい。なまきり名人の子もまたちの表現は、微笑ましく、美しい。

万事を効率で測るような価値基準のもとでは、ひとは生き生きと生きていけない。二十世紀ははつきりしたじつぢやないか。それなら、二十一世紀は何を尺度にするのか——美しさを。

正しくないかもしれない、効率も悪いかもしれない、不便かもしれない、役に立たないかもしれない、儲からないかもしれない、無意味かもしれない。それらのマイナスを引き受けなお、それらを乗り越えて豊かにあられるものがある。それによってしか満たされないものがある。美しさをはらひつたべつこのものです。

あゝ、美しき哉、美哉の子らよー。

